

岐阜県感染症発生動向調査（2018年第36週～第39週分、9月分）コメント

平成30年10月17日

月番：大西 秀典

<全数把握対象疾患>

- ・一類感染症については、発生報告は無い。
- ・二類感染症については、結核は、発症患者および潜在性結核感染症のいずれも前年同期までの累計及び対象月の対前年比と比較し報告数が大きく減少しているが、依然として毎週コンスタントに報告例はある。
- ・三類感染症については、腸管出血性大腸菌感染症は散発しているが、大規模な発生事例はない。菌株としては0157と0103が報告されている。
- ・四類感染症については、レジオネラの散発例の報告がみられる。
- ・五類感染症については、カルバペネム耐性腸内細菌科感染症、急性脳炎、侵襲性肺炎球菌感染症、水痘(入院例に限る)、破傷風、風疹の散発例が報告されているが、今のところ特別発生が多いと思われる感染症はない。
- ・急性弛緩性麻痺(急性灰白髄炎を除く)が2例報告されており、エンテロウイルスD68の流行が懸念される。
- ・後天性免疫不全症候群の報告が、前年同期までの累計と比較し増加しているが、これは岐阜県では昨年の発生数が、例年に比べて少なかったためであり、本年のみが増加しているわけではない。
- ・百日咳は、36週を除き毎週報告(合計10例)されている。
- ・麻疹患者の報告例はない。

<定点把握対象疾患>

- ・インフルエンザの発生が37週から報告されつつあり、今月計で25例の報告があった。
- ・RSウイルスの報告が多く前月比1.68倍の発生があるが、38週をピークに減少傾向である。2017年と同様本年も流行の立ち上がり早い年であったように見える。
- ・咽頭結膜熱が前月比98.2%で引き続き発生がみられている。
- ・A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前月より減少しているが引き続き発生がみられている。
- ・感染性胃腸炎はコンスタントに報告されている。
- ・手足口病は本年では昨年のような大流行はみられなかったが、引き続き前月とほぼ同等の発生数である。
- ・ヘルパンギーナは前年よりも発生数の多い年であったが、32週をピークに減少傾向となり、今月も減少傾向ながら発生は続いている。
- ・流行性角結膜炎の発生が前月比1.57倍に増加している。

- ・結核は、毎週コンスタントに報告があり、引き続き県民および医療者への注意喚起・啓発が必要である。
- ・RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の発生が増加しており、感染性の強いウイルスであるため、県民への注意喚起が必要である。
- ・局地的なインフルエンザの集団発生が報告されており、県民への注意喚起が必要である。